体罰と教育について

今、スポーツの世界で体罰が問題となっている。体罰で人は強くはならない。むしろ弱くなる。

叩かれ続けた者は叩かれる事に慣れてしまう。自分は叩かれるようなダメな人間だと認識する。その結果、弱い人間が出来上がるのだ。むしろ人を強く鍛えたいのなら褒めることだ。褒められれば誰でも自信がつき、やる気が出る。子供は特にそうだ。「そんな甘い事で本当に人が強くなるのか」と言う人もいるかもしれない。しかし厳しく訓練する事と体罰は別物だ。

あるいは大人はそうかもしれないが、子供は言っても解らないので体罰が必要だと言う人もいる。言っても解らなければ、叩いても解らない。解らないまま、それをすれば叩かれると言う事だけ覚えてしまう。いわゆる条件反射だ。生理学者のパブロフは犬に餌を与える前に必ずメトロノームの音を聞かせると、やがてメトロノームを聞かせただけで唾液が出る事を実験で証明し「条件反射」と言った。それで良いのだと言う人もいるが、条件反射を覚えた子供は犬並みである。考え判断する前に、反射行動が出て、考えるチャンスを失うからだ。

これを繰り返すと、考えない子供が出来てしまう。自分で考える前にやって良い事と悪い事が決まっているのだ。これで世間を渡っていけるのなら、それはそれで楽かもしれないが、現実の世の中はそんなに簡単なものではない。

それをやって良いか悪いか、東に行くべきか西に行くべきか、あるいは南北か。選択肢は常に無数にあるのが我々の人生だ。それはその場と、時間による条件により常に変わる。

たとえば目の前の川におぼれた人がいる。飛び込んで助けるべきか、棒か浮きになるものを探すべきか、人を呼ぶべきか。考える時間は少ない。自分で判断する訓練が出来ていない人は、茫然として何もできない事になる。

また皆さんが面接をするとする。一人の募集に三人が来る。一人は素直そうだが暗い。もう一人は体力があるが協調性がなさそうだ。最後の一人は調子が良いが安定感がない。いったい誰を採用したら良いのか、いつも迷うのではないだろうか。考え、迷い、選択する。その選択が間違う事もある。しかし自分で考えて選択したものは、誰に文句を言う事も出来ない。これが経験となり次の場面で生きてくる。

私は人の成長は経験だと思う。それもうまくいった経験、成功体験だ。成功を積み重ねることでやれることも多くなり、その人の器も大きくなる。

失敗した経験はなぜ失敗したのかを推理するが、その仮説が実証された訳ではない。仮説は仮説であり確信にはならない。だからそれをもう一度やってみて成功しなければならない。考え、仮説をたて、実証し、成功し、自信になる。これが「人が成長する」という事だ。

しかし条件反射で選んだ選択肢は常にそれと結びついているので、その選択が間違っている事にはならない。メトロノームが常に餌と結びついているように、その選択は空気のように自明であり、他はないのだ。そうすると、その選択でうまくいかなかった時、悪いのは選択をした自分ではなく、他の誰かと言う事になる。そこからは改善も成長も生まれない。

そうは言うものの、私たちも人間なのでカッと来ることはある。部下が何度も同じ過ちをすれば「何度言ったらわかるんだ！」と怒鳴ることもあるだろう。自分の子なら叩いてしまうかもしれない。しかしこの行動を正しい事として正当化するか、自らの未熟さとして認識するかは大きな違いがある。

問題となったスポーツの世界では、それが正しい指導方法として確立していたらしい。どうりで日本の柔道が勝てなくなったはずだ。これは弱者の論理だ。このような教育法で育った者は奴隷である。奴隷が競争に勝つ事は無い。

かつて私は社会人山岳会に所属し、冬山やロッククライミング、沢登り、縦走などをやっていた。そこにはほとんど大学山岳部出身者は来ない。大学で体育会の山岳部に居た人は卒業すると登山はしないのだ。大学を卒業しても山に来る人は同好会の山岳サークル出身者だ。しかし体育会もまれに間違って入ってくる事がある。そういった人は皆、我々の登山は厳しすぎついて来られない。結局直ぐやめてしまう。

当時は山岳部のシゴキが何度か問題となっていた。私も山でそんな場面を目撃した事もある。しかしそんな事をやっている場所は、我々には笑ってしまうような低いハイキングコースだ。そのような甘い場所で、リュックに石などをつめてトレーニングだと言っている。

本当に厳しい場所だと人をしごいたりは出来ない。そんな余裕は誰にもないのだ。面倒をみる事さえできない。自分の事は自分でやってもらうしかない。自分で考え判断せず、リーダーの指示を待っているような人は足手まといなのだ。

今でも山岳事故を起こす人はそんな人だ。経験のあるリーダーやガイドにしても、そのような人に囲まれると判断を誤ってしまう。皆が自分についてくるので、これが正しいし、この道を進まなければいけないと思ってしまうのだ。最近の山での事故はこれが多いようだ。リーダーが後ろに居るパブロフの犬達の無言の圧力に負けてしまうのだ。しかもその人たちからお金を取っていたらなおさらだ。

だから私は単独行ばかりが多かった。何度も一緒に行動し、気心の知れた仲間でパーティを組んでも二、三人が限度だ。自分の命が惜しいからだ。集団行動ではその中の最も弱い人に全体の水準が揃ってしまう。そのため、人数が多ければそれだけリスクが増える。

登山はよく人生にたとえられる。環境と条件によってやるべき行動が変わってくるからだ。教育の目的はそれを自分で考え判断できる人を育てることだ。

代表取締役社長
鈴木英介

